

夏季セミナー2014 予稿集

東京外国語大学国際日本研究センター主催

国際日本研究センター

夏季セミナー2014

言語・文学・社会

—国際日本研究の試み—

2014年7月29日～8月1日(火-金) 10:00～17:30

会場: 東京外国語大学府中キャンパス
研究講義棟102室、103室

- ◆JR中央線「武蔵境」駅～西武多摩川線「多磨」駅下車徒歩5分
- ◆京王電鉄「飛田給」駅北口～多磨駅行京王バス10分

「サマースクール研究発表会」
7月30・31日(水・木)14:20-17:30 研究講義棟102～105、106室



研究講義棟1F

事務局

夏季セミナー会場

院生発表会会場

主催 / Organized by

東京外国語大学国際日本研究センター
International Center for Japanese Studies
Tokyo University of Foreign Studies

2014年7月29日(火)～8月1日(金)
東京外国語大学府中キャンパス研究講義棟102、103、105室
Tuesday 29 July to Friday 1 August, 2014
Room102, 103, 105 Research and Lecture Building
Fuchu Campus, Tokyo University of Foreign Studies

プログラム / Program

7月29日(火) Tuesday 29th July

会場 研究講義棟 1F 102, 105

Venue 102, 105 1F, Research and Lecture Building

10:00 ~ 11:40 (102)

【ガイダンス】夏季セミナー2014・サマースクール2014の履修方法について……………6
Guidance: How to Sign Up for the Summer Seminar 2014 and Summer School 2014
友常 勉 (東京外国語大学)
TOMOTSUNE Tsutomu (Tokyo University of Foreign Studies)

12:40 ~ 14:10 (102)

【ワークショップ】「詫び」と「感謝」の諸相……………6
Workshop 'Apology' and 'Gratitude'
谷口 龍子 (東京外国語大学)
TANIGUCHI Ryuko (Tokyo University of Foreign Studies)

14:20 ~ 15:50 (105)

【公開ゼミ】大学院言語文化専攻 日本語文学文化研究……………7
Open Seminar:
村尾 誠一 (東京外国語大学)
MURAO Seiichi (Tokyo University of Foreign Studies)

16:00 ~ 17:30 (105)

【公開ゼミ】大学院地域・国際専攻 日本歴史文化論……………7
Open Seminar:
野本 京子 (東京外国語大学)
NOMOTO Kyoko (Tokyo University of Foreign Studies)

7月30日(水) Wednesday 30th July

会場 研究講義棟 1F 102,103

Venue 102,103 1F, Research and Lecture Building

10:10 ~ 11:40 (102)

「日本語における使役文と受身文の似通い」8

‘Similarities and Differences between Causative and Passive’

早津 恵美子 (東京外国語大学)

HAYATSU Emiko (Tokyo University of Foreign Studies)

12:40 ~ 14:10 (102)

「日 - タイ通訳技能向上のためのタスク遂行型学習—ビデオプロジェクトを中心に—」9

‘The Task-based Approach to the Training in Japanese-Thai Interpretation Skills
with a Focus on Video Projects’

タサニー・メーターピスィット (タマサート大学)

Tasanee METHAPISIT (Thammasat University)

10:10 ~ 11:40 (103)

「日本古代文学における「カラクニ」考察 - 韓国から唐国へ -」10

‘Similarities and Differences between Causative and Passive’

金 鍾徳 (韓国外国語大学校)

KIM Jongduck (Hankuk University of Foreign Studies)

12:40 ~ 14:10 (103)

「近現代文学研究の可能性—芥川龍之介の場合—」11

‘The Possibility of Researching Modern and Contemporary: in the Case
of Ryunosuke Akutagawa’

范 淑文 (国立台湾大学)

FAN Shuwen (National Taiwan University)

7月31日(木) Thursday 31th July

会場 研究講義棟 1F 102,103

Venue 102,103 1F, Research and Lecture Building

10:10 ~ 11 : 40 (102)

「スペイン語と日本語の「属性叙述受動文」について」……………12

‘Attributive Passives in Japanese and Spanish’

高垣 敏博 (東京外国語大学)

TAKAGAKI Toshihiro (Tokyo University of Foreign Studies)

12:40 ~ 14 : 10 (102)

「中日翻訳における言語の問題と文化の問題」……………13

‘Linguistic and Cultural Issues within Chinese-Japanese Translation’

徐 一平 (北京外国語大学)

XU Yiping (Beijing Foreign Studies University)

10:10 ~ 11 : 40 (103)

「知的共同体のなかの結婚と恋・愛—夏目漱石『虞美人草』の比較研究」……………14

‘Marriage and Love in Intellectual Communities: A Comparative Study of

Natsume Soseki’s Gubijinso (The Poppy)’

蕭 幸君 (台湾・東海大学)

HSIAO Hsingchun (Tunghai University)

12:40 ~ 14 : 10 (103)

「観世小次郎信光とその能作品」……………15

‘Kanze Kojirō Nobumitsu and His Noh Plays’

林 明珠 (シンガポール国立大学)

LIM Bengchoo (National University of Singapore)

8月1日(金) Friday 1st August

会場 研究講義棟 1F 102,103

Venue 102,103 1F, Research and Lecture Building

10:10 ~ 11 : 40 (102)

「日本社会言語学との出会い、そしてその後の道程」……………16
'My First Encounter with Japanese Sociolinguistics and the Journey that Followed'
任 榮哲 (韓国・中央大学校)
YIM Youngcheol (Chung-ang University)

12:40 ~ 14 : 10 (102)

「語用論と異文化コミュニケーション」……………17
'Pragmatics and Intercultural Communication'
趙 華敏 (北京大学)
ZHAO Huamin (Peking University)

10:10 ~ 11 : 40 (103)

「「社会教育」は Sozialpädagogik かそれとも Adult Education か」……………18
' "Shakai-Kyouiku" : Sozialpädagogik or Adult Education? '
谷 和明 (東京外国語大学)
TANI Kazuaki (Tokyo University of Foreign Studies)

12:40 ~ 14 : 10 (103)

「台湾人から見た日本首相の靖国神社参拝問題」……………19
'Questions by Taiwanese to the Controversies Surrounding of the Japanese Prime Ministers'
Visit to Yasukuni Shrine'
于 乃明 (国立政治大学)
YU Naiming (National Chengchi University)

講義概要 Abstracts

7月29日（火）_102室

【ガイダンス】
夏季セミナー2014・サマースクール2014の履修方法について

友常 勉
東京外国語大学

夏季セミナー、サマースクールを通しての目標と修得すべきスキルなどを説明する。また、東京外国語大学国際日本研究センター発行のジャーナル『日本語・日本学』への投稿を視野に入れ、日本の学会でも提出できるような学術論文の書き方、参考文献のまとめ方などもレクチャーする。

7月29日（火）_102室

【ワークショップ】
「詫び」と「感謝」の諸相

谷口龍子
東京外国語大学

自分の行為を相手に詫びたり、相手の行為に感謝を示す言語行為は、多くの言語の日常生活で頻繁に行われ、人文科学、社会科学の諸分野において研究対象とされています。

「詫び」や「感謝」が、語用論、談話分析や関連分野においてどのように研究されているのか概観した上で、日本語や中国語などについて映画やテレビドラマでの発話データと分析結果を紹介します。言語による異同や言語教育への応用についても参加された方々と討論できればと思っています。

7月29日(火) _105室

【公開ゼミ】

大学院言語文化専攻 日本語文学文化研究

村尾誠一
東京外国語大学

共通テーマである『新古今和歌集』所収歌に関する受講学生の発表とそれに基づく討論を公開の形で行います。

今回はチョヒジンさん(博士後期課程所属)にレポーターをつとめてもらいます。『新古今和歌集』の賀歌「君が代は千代ともささじあまのとや出づる月日の限りなければ 藤原俊成」を発端に、この歌の解釈とともに、「君」という歌語を韓国・中国の詩歌との対比の中で分析する発表となる予定です。是非討論に積極的に参加して下さい。

7月29日(火) _105室

【公開ゼミ】

大学院地域・国際専攻 日本歴史文化論

野本京子
東京外国語大学

ゼミの院生(博士後期課程を含む)による各自の研究テーマと概要の報告後、当日、参加した方々にも加わっていただき、研究テーマの設定や方法論などについて話し合います。積極的に議論に加わっていただき、出席者間の交流を深めたいと思います。

日本語における使役文と受身文の似通い Similarities and Differences between Causative and Passive

早津恵美子
東京外国語大学

使役文と受身文とは典型的には異なる事態を表現するタイプの文である。したがって、ふつう使役動詞(「V-(サ)セル」)と受身動詞(「V-(ラ)レル」)を入れかえることはできない、あるいは入れかえると別の事態を表現してしまう(「親が子供に食器を洗わせる (vs. 洗われる)」 「花子が先生にほめられる (vs. 先生をほめさせる)」)。しかし、ある条件のもとでは使役動詞による表現と受身動詞による表現とが、微妙なニュアンスの違いはあるものの、同じ一つの事態を指しうる場合がある(「似通い」)。「このことは誰にも {気づかせては: 気づかれては} ならなかった」「戦争で {子供を死なせる: 子供に死なれる}」等。

この現象について主として使役文の側から、(1) 使役文と受身文のどのような性質が両者の似通いを支えているのか、(2) どのような条件のもとで似通いが生じるのか、(3) 似通うとしても両者にはどのような違いがあるか、について考える。

日-タイ通訳技能向上のためのタスク遂行型学習
ービデオプロジェクトを中心にー
The Task-based Approach to the Training in Japanese-Thai
Interpretation Skills with a Focus on Video Projects

タサニー・メーターピスイット
タマサート大学

タイのタマサート大学日本語プログラムでは、2003年より学部4年次科目として、日本語とタイ語の通訳入門の科目が導入され、現在「通訳入門クラス」として「将来の職場に応用できるよう通訳のテクニックを身につけること」を目的とした授業を行っている。授業では、タイ語-日本語の逐次通訳と、日本語-タイ語の同時通訳の活動タスクに加え、言語的知識及び技能の向上を図るタスクも行っている。本発表は、「通訳入門クラス」で言語的知識及び通訳の技能の向上を目標として試みた、グループワーク「タイ文化紹介の日本語ビデオ作成」および、個人タスク「デジタル教材のタイ語吹替版作成」の実施方法、内容、結果、評価について述べる。また、実施上の問題点や今後の課題についても考察を行う。

7月30日(水) _103室

日本古代文学における「カラクニ」考察 - 韓国から唐国へ -
A study of "Karakuni" in Japanese Ancient Literature
- from "Karakuni" to Tang Dynasty

金鍾徳

韓国外国語大学

日本の古代文化は中国源泉の文化が朝鮮半島経由で日本へと東流されたものが多い。そこで日本の古代文学には朝鮮半島の文化があらゆる形で影を落としている。『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』には、韓、加羅、韓国、高麗、百済、新羅など、文化の東流にともなう朝鮮半島の国名が散見される。これらの国名には韓国では散逸してしまった文化も化石のようにこびり付いている。また文化交流や戦争、外交関係などが投影されているので、古代日本の朝鮮半島に対する認識がよく表れている。

ところが、平安時代になると途端に朝鮮半島の国名は急に少なくなり、『源氏物語』などで「韓国」はほとんど「唐国」に代わっている。そこで今回の報告では、これらの国名を中心に日本と朝鮮半島の文化交流、渡来人の役割などを調べてみたい。特に古代から平安時代までの文献に表れた朝鮮半島のイメージや認識の変化を考察する。そして古代の日本にとって韓国はどんな国であったかを究明し、日韓の文化交流の源泉に迫ってみたい。

近現代文学研究の可能性—芥川龍之介の場合—
The Possibility of Researching Modern and Contemporary: in the Case
of Ryunosuke Akutagawa

范淑文
国立台湾大学

近現代文学研究に言及する際、実証法や作家論などが最も古い方法であろう。その後は作品論、テクスト論、物語論、記号論など、様々な研究方法がすすめられてきた。グローバル化に伴い、文学の研究方法にも時代の潮流に應じるように変化が見られてきた。一言でいえば、一つのジャンルにこだわらず、学際的な研究が一つの流行とも言えよう。古い題材でも、心理学や海外の視点による研究、または作品の中にある海外的要素など、違った方向から問題点を見詰め直すと異なった捉え方や結論が浮かび上がることが可能になるのである。

今回は日本近現代文学の中で最もよく知られている作家の一人である芥川龍之介を実例としてその研究方法の可能性を考えてみる。

7月31日(木) _102室

スペイン語と日本語の「属性叙述受動文」について Attributive Passives in Japanese and Spanish

高垣敏博
東京外国語大学

日本語の二格動作主をとる受影受動文（昇格受動文）は他者から事象を通じて何らかの影響（受影性）を受ける有情主語を典型とする受動文である。ところが、非情名詞を主語とするいわゆる「属性叙述受動文」（この雑誌は 10 代の若者によく読まれている）では受影性が関与しなくても二格動作主をとり、受動文が成立する。

一方、スペイン語にも英語の受動文に似た <ser + 過去分詞 + por 動作主> がある。この受動文は動詞の語彙アスペクトにより厳しく制限されており、一般に限界性（完了性）をもつ動詞でなければ受動化が許容されない。ところが、動作主が総称性（あるいは複数性）を帯びると受動化が可能になる。これを一種の「属性叙述受動文」と考えることにする。

セミナーでは、両言語の受動文を概観し、どうして、属性叙述のレベルになると、制限されている受動化が可能になるのか考えてみたい。

中日翻訳における言語の問題と文化の問題
Linguistic and Cultural Issues within Chinese-Japanese Translation

徐一平
北京外国語大学

異文化間の交流は翻訳から始まる。翻訳は異文化をつなぐ黄金の鎖とさえ言われている。外国語教育の中では、翻訳も重要な手段だと教えられている。

しかし、翻訳においては、言語の問題と文化の問題が共存している。翻訳に即して考える場合、言語は基本的には翻訳可能であるが、文化は基本的には翻訳不可能になっている。

そのような問題と関連して、川端康成の『雪国』という実際の翻訳作品の冒頭部分を例にとりながら、この問題を説明する予定である。

7月31日(木) _103室

知的共同体のなかの結婚と恋・愛—夏目漱石『虞美人草』の比較研究
Marriage and Love in Intellectual Communities: A Comparative Study
of Natsume Soseki's Gubijinso (The Poppy)

蕭幸君

台湾・東海大学

二葉亭の『浮雲』において、立身出世とともに見出された結婚、恋愛の命題が、その後の多くの作品にも採りあげられている。そこに描かれている結婚、恋愛のあり方の多くは、明らかに当時の知的な共同体のなかで形成された行為であると思われる。これらの作品のなかでも、とりわけ漱石の『虞美人草』は実に多くの徴候を提供してくれる。本発表は、作品のなかにおける〈結婚〉〈恋・愛〉の捉え方が、一種の知的バロメーターのような働きを持つと仮定し、谷崎潤一郎の『痴人の愛』、台湾植民地時代の作家張文環の『山茶花』などに言及しつつ、比較検証を行う。

観世小次郎信光とその能作品
Kanze Kojirō Nobumitsu and his noh plays

林明珠
シンガポール国立大学

観世小次郎信光（1435-1516）は室町時代の重要な能役者である。数多くの能作品を創作しただけでなく、太鼓の名人としてもよく知られている。当時、信光は観世座のリーダーとあってよい存在で、兄の又三郎正盛が亡くなった後、その幼い後継者を支え、観世座が直面した困難を解決しつつ、観世一座の能楽界における地位を強化した。能作の面においても、いくつかの能作法が信光の創始によるものだとされている。

現在作者が確認できる謡曲の中で、世阿弥の次に作品数が多い作者は信光である。それにもかかわらず、信光の名前は史料でも現代の観客にもそれほど知られていないのはなぜでしょうか。信光の能作品は題材も内容も多彩で、よく「風流能」と呼ばれる。『船弁慶』のように波瀾万丈でドラマチックな作品はその例である。ただし、漢詩文が多数引用される『胡蝶』のように優雅な幽玄美が表現されている作品もあるので、信光の才能は風流能に限られるわけではない。

本レクチャーでは、信光の生涯とその幅広い能作品の議論を通じ、能楽史における信光の重要性を説明するつもりである。

Kanze Nobumitsu (1435-1516) is one of the most important noh practitioners in the history of noh. Other than the many noh plays that he has composed, he was also instrumental in leading the Kanze troupe through a dire period of leadership and economic crisis. He was also believed to be the first to use varied technique in the composition of noh plays.

My lecture aims to introduce Nobumitsu the versatile and talented composer and his representative work. Many have associated him as the Furyū noh composer and at times associate the late Muromachi period as the Furyū noh period. It is important to also understand that Nobumitsu has a larger body of work which includes various style and contents. I believe that a better understanding of Nobumitsu and his work will provide a more comprehensive understanding of the noh theater today.

8月1日(金) _102室

日本社会言語学との出会い，そしてその後の道程
My First Encounter with Japanese Sociolinguistics and the Journey
that Followed

任榮哲

韓国・中央大学校

本稿では，第一に，韓国における日本語教育の歴史や日本語の位置づけ，そして日本の社会言語学との出会いについて回顧する．第二に，今まで行われてきた在日韓国・朝鮮人や在米韓国人の言語生活に関する研究成果の一端を紹介する．第三に，韓国人と日本人のコミュニケーション・スタイルについてあいづちの頻度や個人テリトリー意識，さらには韓・日・中3国の依頼過程における不満表明の解明についてムーブという観点から考察する．第四に，韓国の社会言語学の動向について，日本のそれと比較しながら，韓日の社会言語学がこれまでにどの分野でどう研究されてきたか，そして今後の展開としてどのような方向へと向かえば良いかについて分析する．最後に，現在の韓国の日本語教育界において焦眉の関心事である日本語教育の現状について述べることにする．

語用論と異文化コミュニケーション
Pragmatics and Intercultural Communication

趙華敏
北京大学

語用論は社会の風俗、価値観や文化の規約などによる適切な言語使用を研究する学問であり、異文化コミュニケーションは 20 世紀 60 年代にアメリカから源を発した人類学・社会学・翻訳学・語用論など関係のある学際的な研究である。語用論と異文化コミュニケーションの研究は国や言葉の違う話者がコミュニケーションをするときに生じる違和感を説明するのに大いに役立つ研究分野だと思われる。本講義はこの角度から、中日のコミュニケーションの相違を分析し、そこから生まれる誤解や相互理解の齟齬を少しでも解明できるのに資するように期待する。

「社会教育」は Sozialpädagogik かそれとも Adult Education か “Shakai-Kyouiku” : Sozialpädagogik or Adult Education?

谷和明

東京外国語大学

学校外で行われる主に成人や低学歴青年層を対象とする教育の領域は欧米では、19世紀には民衆教育、労働者教育として発展したが、20世紀には「成人教育」(Adult Education)と総称されるようになり、現在に至っている。他方日本では、1880年代以降「通俗教育」と称されていたのが、1920年代からは「社会教育」と呼ばれるようになり、戦後は「社会教育法」によって制度化されてきた。このような対応関係に基づき、「社会教育」は Adult Education であり、Social Education と訳すべきでないという理解が一般化してきた。

ところが近年、「社会教育」と欧米の Adult Education は必ずしも同一ではなく、むしろドイツを中心に発展してきた Sozialpädagogik (英: Social Pedagogy) と訳すべきという主張が登場するようになった。

この「社会教育」の適切な訳語をめぐる問題を、「社会」+「教育」という造語が行われた近代日本社会のコンテクストを参照しつつ、社会的実践を表現する概念の翻訳可能性という視点から考察してみたい。

台湾人から見た日本首相の靖国神社参拝問題
Questions by Taiwanese to the Controversies Surrounding of the
Japanese Prime Ministers' Visit to Yasukuni Shrine

于乃明
国立政治大学

1980年代から、台湾の民主化が進み、歴史問題への見方が多岐に分かれた。靖国神社問題についてもそうである。

例えば政治傾向の違いから、国民党と民進党の支持者は政治背景とイデオロギーが大きく分かれ、日本首相の靖国神社参拝への反応は正反対である。この他に、李登輝元総統と金素梅元議員は出身が本土か外省か（金元議員の母は原住民である）の違いから、意見も分かれた。特に外省の第一世代の多くは日本首相の靖国神社参拝には反対である。しかし、今どきの若者はどんな見方をしているのか、観察に値する。

これらの現象は今日台湾社会の民主多元化を反映している。

== MEMO ==

東京外国語大学国際日本研究センター

「夏季セミナー2014 予稿集」

- Summer Seminar 2014 Abstract -

発行:2014年7月28日

編集者・発行者 東京外国語大学国際日本研究センター

代表者 野本京子

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 アゴラ・グローバル 2 階

電話/FAX:042-330-5794 E-mail: info-icjs@tufs.ac.jp

URL <http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/jp/>